

## 徳山藩校にかかわる

## 新資料

会員 清 木 素

其一―石田義陳の墓見つかる―

鳴鳳館第二代教授役藍泉の著「徳府学範」を楷書で書き、現代徳山中央図書館に一冊残存している。

藍泉は詩文については、恐らく徳山文学界の第一人者といっても過言ではない。

本城紫巖教授の後を受けて学館を主宰し、文化五年（一八〇八）主命を奉じて新たに「徳府学範」を草し、鳴鳳館教学の刷新をはかった。

この「徳山学範」は詩文・経書の修学の順序を説き、藍泉は経義より文辞に重点を置き、徂徠学の面目をうかがうことができる。藍泉も徂徠に追随し、和訓によらないで古語を以って古語を推測する方法を取っている。

「華和を合してこれを一にす、古今を合してこれを一にす、これ古文辞学なり」という徂徠学に徹した方法を取って、学範にはその家学の法則を示している。

この学範を整然と達筆の楷書で書写している、石田義陳

の墓が路傍に捨置かれていた。故田中竹堂氏より、萬福寺と書かれた墓があるとの通報を受け、直ちに新南陽市川崎観音付近に於いて、石田義陳の墓であることを確認し、早速拓本にて解読した。

義陳は文化十一年里正（庄屋）となり文政二年（一八一九）職務勉勵の故をもって銀を賜わる。その後しばしば賞せられ、嘉永七年（一八五四）七十六歳でなくなり万福寺の墓に葬る。

義陳翁は生まれつき慎重でことば少なく、誠をもって人に接し、庄屋となっても村の人々がよくなついていた。翁は経史や書道や歌道の勉学につとめ、老いて益々盛んであった。また道芸に秀でた行政家でもあり村人の信望が厚かったという。次に拓本による碑文を記す。

翁諱義陳族石田氏称方助其先出自多々良氏九世祖伊豆守慶長廿年在大坂以廢疾請罷就郷里内府賜佩刀遣之亦頗為我天樹 發性二公所禮遇子孫世居千周防川崎考曰惣左衛門翁其季子也翁少別成産兄弥左衛門没無嗣文化八年継其後十一年為里正文政二年以其奉職勤恪銀若干翁前後獻金米助土木者数焉屢有賞賚嘉永七年十一月四日卒享年七十有六葬于宅北萬福寺先塋之次翁為人慎重寡言接人以誠其為里正頗獲民心既老最為郷人所歸嚮皆称曰主翁不敢名焉翁少受經史於藍

泉役先生之門又從吾先人學書而其卒前數月復從余請受書法  
余深感其志乃舉所講究以授之筆札頗有可觀者其志氣就實  
老翁壯亦可以概翁之平生矣翁娶田中氏生二男三女長曰安藏  
嗣其後次日道藏析產爲葉舖銘曰

遙々華胄 乃得斯翁 躬居一鄉 爲衆所崇 志有道芸

老而益通 鞠川之畔 靈峰之中 鶴斯貞珉 永安比宮

七十一翁巢雲 淺見敏撰并書

注淺見巢雲一巢雲名は正敏字は子慎 通称又兵衛、幼時か  
ら才幹万人に優れ、長じて本城紫巖・役藍泉に師事し後  
長崎に遊び、清人について筆跡を研究。小野道風・僧空  
海の筆意を学び、そのほか経學・詩文・劍術・槍術から  
茶道・音律に至るまで諸芸に通じ学館の句読師に補せらる。  
次に墓碑銘を書下し文にて示してみよう。

翁諱は義陳。族石田氏。方助と称す。その先は多々良氏  
より出ず。九世祖伊豆守という。慶長廿年（一六一五）大  
坂に在り。廢疾を以て罷を請ひ郷里に就く。内府佩刀を  
賜い之を遣わす。亦頗る我が天樹（輝元）・発性（就隆）  
二公の礼遇する所となる。子孫世周防川崎に居す。考を惣  
左衛門と曰う。翁その季子なり。翁少にして別に産を成す。  
兄弥左衛門没して嗣なし。文化八年その後を継ぐ。十一年  
里正となる。文政二年その職を奉じ勤恪なるを以て銀若  
干を賜う。翁前後金米を献じ土木を助け数なり。嘉永七年

十一月四日卒す。享年七十有六。宅北萬福寺先塋の次に葬  
る。翁人となり慎重寡言。人に接するに誠を以てす。そ  
の里正となり、頗る民心を獲たり。既に老い最も郷人の帰  
嚮する所となる。皆称していわく、主翁敢て名をせず。

翁少く経史を藍泉役先生の門に受く。又吾先人に従い書を  
学ぶ。その卒する前数月また余に從いて書法を受けんこと  
を請う。余深くその志に感ず。乃ち講究するところを挙げ  
て以て之に筆札を授く。頗る観るべきものあり。その志  
氣実に就く。愈老いて愈壯なり。亦もつて翁の平生を概る  
べし。翁田中氏を娶り、二男三女を生む。長を安藏と言ひ  
その後を嗣ぐ。次を道藏という。産を析ちて葉舖となる。  
銘にいわく、

遙々華胄。乃ち斯翁を得たり。躬ら一郷に居す。衆の崇

む所となる。志道芸に有り。老いて益通ず。鞠川の畔。

靈峰の中。斯を貞珉にほる。永くこの宮に安ぜん。

追記

紫巖六秩賀寿序歌（御園生翁所蔵）

これは徳山藩学鳴鳳館祭酒（館長）本城紫巖六十の賀章  
にして、作者としては役藍泉・長沼采石石田義陳等藩の鴻  
儒諸知友四十四人数え、紫巖其贈辞を一鉅軸となし、装潢  
して家に蔵め自ら跋を作る。寛政十二年石田義陳が騰写し  
たものである。

この原本の所在が明らかではないが、石田翁は書家のみならず、歌道の方も優れていたことが分る。(この資料は防長史料文献解題の三十三頁にある。) (P12写真参照)  
 其二 鳴鳳館第二代館長役藍泉先生の碑銘のある墓が発見された。

所は福川真福寺墓地にある福田龍助の墓に左右後面三面に銘文が刻まれている。

鳴鳳館の在校生の氏名については寡聞にして知られてなかったが、福川地区の生徒の概要が分り、而も館長の銘文のある墓ははじめてであり、この福田龍助は信望の厚かった生徒であったことがうかがわれる。

不明なところもあるが拓本によって概要を示すことにする。

為福子龍墓悲夫子龍福川人福川学雖曰子龍艸創之可也子龍始嗜歌好詩文蓋人皆謂文学何於市捨尔交易費心無用段使錦冊囊實錢不直守錢虜託其為仁不富說雖是競帖今自喜其極至利所在骨肉賊不亦左乎子龍自從余学月必數往來數里移晷而去類未曾知市有折退當其職亦大顯且其人謙冲温接物不格至孝友則頗天性云以故所謂守錢虜亦不能客喙子龍□□子龍以年末而立論為街長豈無恣族唯其温籍稱衆望己斯數年患血經歲不已遂以寬政五年癸丑六月日死年僅三十葬于真福寺其弟孝助出繼河村氏住我府下泣告狀請碑其墓因銘之銘去

交易安職其業不疎文雅養志其技、有餘温籍接物足以□□

藍泉子 役観謹誌

福田龍助光久

其三 興讓館の印のある文書発見

鳴鳳館が嘉永五年(一八五二)に興讓館と館名が改称された。

この嘉永年間には教学は大いに振興された。積菜せきさいの祭も盛んになり、養老の礼が始められたのもこの頃である。

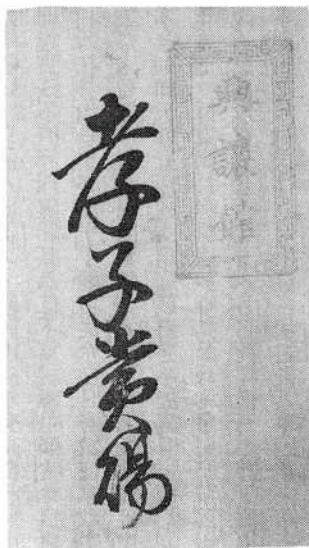
弘化三年(一八四六)小山乾山・飯田竹塙らの主唱によって、学館に積菜の制が設けられた。

翌四年正月十四日、家中に沙汰して積菜は藩主の在國中、毎年一度これを行ない、来る二月十七日を卜して実施することを定めた。

同日は自由に士族の参拝を許し、また手元役・評定役・両人役並に教授方・助教方・訓導役が積菜の儀に当ることになった。

興讓館における積菜の礼典は、まず祭官が座に着いて迎神・奠幣・進膳・初献・亜献・終献・受福の順序で行なう。受福の後に藩主が参堂し、祝文を捧げ拜礼して退出。祭官が再び席について行拜・撤饌・講釈・望煙の儀が行われる。当日の迎神文・送神文・及び藩主の祝文には一定の文例





孝子賞賜

があり、式後には長寿者・孝子各一名が代表として講堂の縁側に上がって拝礼を許され、各々鳥目若干を賜わる例であった。これらの養老の礼は中国では「礼記」に見え、日本でも古来しばしば行われ、宗藩では明倫館創立の当初から慣例となっていたものである。

この年長者・孝子への賞状に興譲館の印が押されているのが、新南陽市新町中磯部淳氏宅に残存している。また同家には孝子表彰沙汰書も残っている。

右に年長者・孝子の興譲館の判を押した孝子沙汰書の写真を示す。

高年恵賜三枚・孝子賞賜五枚の月日を見ると必ずしも一定していなかったことが分る。

八月十八日・十一月十五日・二月八日・三月六日・四月二日の分が残存している。